

オブジェクト指向技術に基づく新しいシステム開発手法 「AGILO²」アジャイロツォー（商標登録出願中）について

今年度より、当社はオブジェクト指向技術をコアとする新しいシステム開発手法「AGILO²」（アジャイロツォー：Agile + Object Oriented）を適用した情報システム構築事業を本格的に展開します。当手法は当社が長年の経験、蓄積をベースに体系化したもので、情報システム開発コストの大幅な削減と納期短縮を可能とします。経営環境が厳しさを増す情報サービス業界において受注獲得の強力な武器にしていきたいと考えています。

「AGILO²」は以下のような特徴を持っています。従来のウォーターフォール型開発に比べ、コンパクトで柔軟なシステム開発が可能となり、顧客のニーズに迅速に対応できるとともに、情報システムの初期投資とランニングコストを抑制することができます。「AGILO²」は、中核機能から逐次完成させていくインクリメンタル（逐次増強型）的開発の進め方に特徴があり、早期に顧客が目で見、操作することによって確認できるため、仕様の伝達ミスによる手戻りが防止できるとともに、環境変化に応じた仕様の変更にも柔軟かつ迅速に対応することができます。

< 「AGILO²」の特徴 >

- ・ビジネスアプリケーションの基本構造抽出を重視する。
- ・ビジネスアプリケーションの基本構造 と データベース構造 を同一形で捉える。
- ・DA（データ・アドミニストレーション；データの統一的定義）を重視する。
- ・データベースの正規化（重複・冗長性の排除）と共に、手続きを部品化する。
- ・モデル（基本構造）から実装までをシームレスに開発する技術体系を充実。
- ・ユーザ機能を早期可視化し、成果物および開発プロセスへのフィードバックを迅速化。
- ・業務変更/改造への対応を容易にし、かつ改造に伴う複雑化を抑えるシステム構造を持つ。
- ・中核機能から逐次完成させていくインクリメンタル（逐次増強型）開発を実施。
- ・当開発スタイルに向く相互協調型チーム編成（階層型 フラット）

当社は、「AGILO²」事業の本格的な展開に向けて、専門の組織を設置し、推進体制を整備。年内に現在の2チーム体制をから5チーム体制に拡大する予定です。売上高としては、当面03年度：5億円、04年度：10億円を見込んでいます。

当社が今「AGILO²」に注力する理由

当社は、1970年代よりビジネスアプリケーションシステムを構築する中で、情報システムの中核を成すものをデータベースと捉え、その設計手法としてデータモデリングを重視してきました。また、システム開発の生産性を高める技術として、部品化・再利用技術の開発に取り組み、早くから、部品化の対象をデータベース化する対象と同一視して各種取り組みを行ってきました。

オブジェクト指向技術は、まさにこの二つを融合する技術であり、ビジネスアプリケーションシステムの構築に向けた技術と認識して研究開発を続けてきました。

このような土壌があり、実際の適用も積み重ねて来てその有効性を実際に確認し、本格的にビジネス適用する時期に來たと判断しました。

何故「AGILO²」により高生産性が可能になるか

オブジェクト指向では、「再利用によって生産性が上がる」といいますが、生産性が上がるも上がらないも設計次第です。

「AGILO²」は、モデリングによって要求を的確に捉え、それをコンパクトに実現することを最大の狙いとします。モデルがコンパクトになればシステムの規模が小さくなり、結果的に生産性が上がります。そのために必要になる方法論やツール、それらのトレーニングはもとより、業務内容をお客様と一緒に考え、より良い方向付けを行い、意思決定から開発の全工程を一貫してマネージメントする総合技術を提供します。

オブジェクト指向の適用効果を十分に発揮するためには、単にツール・言語や部品などの技術の導入だけでは不十分です。もっとも重要なのはオブジェクト指向でシステム開発を行うための開発フォーメーション、プロジェクトマネジメント、コンサルテーション等の実践的な技術です。

一方、オブジェクト指向を適用したことによって「逆に生産性が下がりコストがオーバーした」とか、「稼働後のメンテナンスで苦労した」という話も聞きますが、この原因はそれらの実践的な技術が不足したことにあると考えています。

「AGILO²」では、この開発フォーメーション、プロジェクトマネジメント、コンサルテーション等のオブジェクト指向でシステム開発を行うための実践的な技術が大きなウェイトを占めています。このような総合的な取り組みによって、生産性向上を享受できる体系的技術に仕上げることができました。当社のこれまでの事例における実績では、大幅な生産性向上が図れています。

システムメンテナンスの生産性は

運用段階に入ってから拡張/改造の局面の生産性向上も、「AGILO²」の大きな狙いの一つです。

ウォーターフォール型の開発では、ツリー構造のフォーメーションと複数職種の分業によって、同様な処理が散在することになり、保守を難しくしますが、「AGILO²」では部品化による処理の一元化が潜在的な不整合を少なくし安定運用に貢献します。

さらに機能拡張や改造も、手を加えるところが明確化・局所化され、容易になります。勿論この場合も、適切な要求分析に基づくモデリングやインクリメンタルな開発に適したプロジェクトマネジメントが不可欠であり、「AGILO²」はこれらを可能にします。

オブジェクト指向適用における当社の持ち味（技術的な優位性）

オブジェクト指向をビジネス基盤とするITベンダーは、下記の3種類に大別できます。

コンポーネントやフレームワークを武器としてSIを手がけるもの

オブジェクト指向開発を支援するツールの提供に端を発しSIを手がけるもの

新しいオブジェクト指向開発アプローチのコンサルテーションを重視し、SIを手がけるもの

当社は、 に属します。お客様の求めるシステムによる価値を重視してSIに取り組み、そこで必要になるツールやコンポーネントは手段として活用します。重点はあくまでシステムの構築にあります。

上述の通り、オブジェクト指向の効果を十分に発揮するためにはツールやコンポーネントを使いこなすための実践的な技術がもっとも重要であり、これらは実際の開発経験に基づいてオブジェクト指向の本質を理解し、蓄積したノウハウがベースとなります。

このことが、オブジェクト指向開発における当社のコア・コンピタンスとなっています。

「AGILO²」の適用対象システム

ビジネスアプリケーションシステム、中でも各業界の基幹系システムを対象とします。

対象は、あくまで確たるモデルが描けるものですので、確たるモデルを描くことは殆どなく、また分析加工ツールに依存することが多い情報系への適用は要検討です。

また、最近では以下のような性格の案件が増えてきており、これらには当手法が適していると考えています。

- ・インターネットが業務の基盤に育ったことで、Web化等でリフレッシュやアドオンのニーズが高まる。このような基幹系システムのリフレッシュやアドオンの案件
- ・ビジネススピードの高速化に伴うビジネスモデルの見直しが広がりますが、慣れたビジネススタイルではなく、そのシステム化に明確な要件提示が難しい場合があります。要件を確定しつつ、同時にシステム化を進めるような案件

以上